

Title	歴史の動向を支配する偶發事件
Sub Title	
Author	占部, 百太郎(Urabe, Hyakutaro)
Publisher	三田史学会
Publication year	1933
Jtitle	史学 Vol.12, No.4 (1933. 12) ,p.1(581)- 17(597)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19331200-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

歴史の動向を支配する偶發事件

古 部 百 太 郎

一

イギリスの國王に代つて一切の政治を料理する内閣と、その内閣を主宰する宰相の兩制度が、如何にして發達して來たかといふことは、イギリス憲法史上に於ける最も興味ある問題である。而してこの内閣も宰相も、兩つながら、イギリスの法律上公認せられてゐない、即ち憲法政治の慣習上發生したものであるから、其間に久しう歴史的過程を経て來たものである。イギリスの歴史には、偶發のインシデントが歴史の動向を支配した幾多の實例がある。その中の最も著るしい例を取るならば、ヘンリイ八世が皇后カタリナを離別した事が、偶然イギリスに宗教改革が起る動機となつたり、ジエトムス二世が晩年になつて、イタリヤのモデナから嫁した王妃に男兒を産ました事から、結局一六八八年の光榮革命の機運を促進したのである。ギイリスの内閣及び宰相の制度も亦、偶然の事の機縁から、確立せらるるに至

歴史の動向を支配する偶發事件（古部）

(三)

一

つたのである。法律と云ひ、制度と云つても、元々人間が造つたものであるから、人間の手によつて變更せられたり、破壊せられたりするのは敢て怪しむに足りないけれど、確固たる方針を以て進んで行く歴史の動向が、些細なる人事の關係から非常なる變動を蒙ることがあるのは、運命の皮肉といはうか、兎に角不思議といへば不思議である。

二

イギリスには昔から國會はあつたけれども、事實に於ては、唯だ課稅の事に就て相談をされた位で、國王が最初の程は行政は勿論、裁判の事も司どり、立法の事も親から提案して居つた。ところが、一七八八年の謂ゆる光榮革命を経て、國王が最後まで緊握してゐた行政權までも、その手から離れて行く傾向が熾んになつて、結局國王に代つて、國會即ち國會の多數黨を代表する内閣が行政權までも掌握するに至つたのである。前にも述べた通り、内閣とその内閣を主宰する宰相とは、不思議にイギリスの法律で認められてゐない。憲法にも如何なる法律にも、内閣といふ文字も、宰相といふ文字も看不出すことは出来ないのである。これは即ちイギリスの憲法といふものが、或部分は法文の上に現はれてゐるけれども、その大部分は書いたものではない、唯だその政治を運用する人達の間に於ける諒解、默契、或は習慣から成立つてゐるからである。これは餘程奇妙な現象である。ところが、この法文上に認められてゐ

ない内閣及びその内閣の束ねをする宰相が、結局一國の政治上の實權を握るやうになつた事に就ては、其處に面白い歴史がなくてはならぬ理由である。

難かしくいへば、イギリスの内閣制度は樞密院の非公式委員會から發生したものである。イギリスの樞密院はノルマン國會の行政部から派生したもので、一二五〇年頃まで國家の大臣、國務大臣、高僧、國王常侍の宮内大官から組織せられた單なる『議政府』(King's Council)であつて、議政官の數も少かつた。ところが、年代を経過するに従つて、その頭數が増加して來たので、自然その中から少數の大臣を選んで國王が祕密に國務を相談するに至つて、一四〇〇年頃から『樞密院』(Privy Council)と稱せられた。併も尙ほ顧問官の人數が漸次殖えて行くと共に、國王が國家の大事を相談した場合、動もするとその祕密が外間に漏れる。勿論樞密顧問官に任命せらるる際、國王の前で國家の祕密を嚴守するといふ宣誓をしなければならぬのだが、矢張祕密が屢々漏洩した。これではならぬといふので、チャールス一世の時、樞密顧問官の中から、少數の人を選抜して、國王が自分の密室で相談した。『内閣』(Cabinet)とは密室の義である。國王が相談した事柄は、イギリス國王が最も重きを置いた外交政策に關する問題であつた。ところが、何十人もある樞密顧問官の中で、三人か五人だけが小さな密室に呼び入れられて、國王から相談をかけらるるから、自から他の多數顧問官の中には嫉妬の眼を以てこれを見る者を生ずるに至つた。チャールス二世の時に國王から祕密の相談を受けた五人の大臣 Clifford, Arlington, Buckingham,

gham, Ashley, Lauderdale の頭字を綴り合せると、偶然に Cabal といふ字に當る。Cabal なる言葉を酷に解釋すれば、『悪い仲間』の意義である。それで『ナニ Cabal か』と惡評せらるるやうになつて來た。それから、國王から相談を受けない多數の顧問官の間に、樞密顧問官たる者の權利を回復しようといふ企てが起つて來た。即ち有名なる學者のテンブル卿が國王の需めに應じて、樞密院の改革案を立てた。それは樞密顧問官の數を三十人に制限して、十五人は官吏の中から選び、他の十五人は高僧と學者と實業家から選任するといふ案であつた。チャールス二世はこの案を採用して實行して見たが、依然として國家の祕密が漏洩したので、やがてこの方法も廢棄せられた。それから又、『賤祿令』(Act of Settlement) と稱する法律の中に、一國の政治は國王が樞密顧問官に相談して、その相談を受けた顧問官は、條約案たると、法律案たるとを問はず、その事柄に就て、必ず副署をするといふ事に規定せられた。併しこれも、實行は出來なくて、結局廢棄せられた。

III.

即ち矢張り内閣制度がどうしても必要である。多數の顧問官に相談は出來ない。依然その中の少數の人々に相談する必要が起るのだが、ウィリアム三世及び女王アンの兩治世の間に、内閣制度は着々と進展の歩を辿つた。ところが、内閣はどうしても、同一黨派から組織せられなければ、國策に關する議が纏

まる筈がない。五人なら五人、七人なら七人、三人と二人とか、四人と三人とかの多數決で押して可いこともあらうけれど、それでは結局國策を確固に樹立することは出來ない。どうしてもこれは同主義者が——ホイッグ主義でもトーリイ主義でも——内閣を組織しなければ、到底國政は旨く行かない。それを旨くやるには國會でホイッグ黨が多數を制してゐるならば、ホイッグ黨の内閣でなければいけない。トーリイ黨が多數ならば、トーリイの内閣でなければならない。かういふ必要が迫つて來た。それから、又國王が從前通り、内閣會議の議長をしてゐては、依然責任は國王に歸するから、内閣制度は確立せられない。同一主義者が連帶責任を負うことにならぬから、國政の運用は旨く行かない。ところが、ウィリアム三世でも、女王アンでも、依然自身に内閣を主宰してゐた。さうして自分が主として法律案を立て、政策の決定に當つたから、自然内閣大臣に責任が歸せずして、議會の多數黨との折合が旨く行く筈がなかつた。それで女王アンの治世には、やがて同一主義者の内閣を組織しなければならぬ大勢が漸次に釀されて來た。かかる大勢に逆行して、女王は依然自身に内閣會議を主宰して、成るべくその好んだトーリイ黨側の政治家を内閣に列せしめた。而もその中には一方のホイッグ黨側の政治家も混つてゐたので、従つて國會の操縱が旨く行かなかつた。此の如く國王が自身に内閣會議を主宰しては、責任は自から國王に歸して、啻に大臣の連帶責任制が立たないのみならず、内閣の首脳たるべき宰相といふやうなものは、出來よう筈がなかつたのである。

歴史の動向を支配する偶發事件（古部）

四

ところが、イギリスは一六八八年の光榮革命の結果、舊教徒は王位に即くことが出來ず、イギリスの王位に即くには、イギリスの王系を引いた人で、而も英國國教徒でなければ可けないといふことが、法律で規定せられた。それは即ち『踐祚令』である。この法律には踐祚の事ばかりでなく、他の前に述べた樞密顧問の責任と云ふやうな事も規定せられたが、主に國王の踐祚資格の事が規定してある。ウイリアム三世と、女王マリイとの間には子がなかつた。その次代の女王アンには子があつたけれど、夭折してしまつた。それで、スチュアート王家の直系は殆ど全く絶滅した。ところがドイツの聯邦の一箇であつたハノーヴァーの選舉侯ジョージ親王は、スチュアート王系の血統を受けた人であつた。イギリスのジェームス一世の皇女エリザベスがドイツのファルツの選舉侯フレデリックに嫁して、その間に産れたソフィヤがハノーヴァーの選舉侯に嫁した。而してその間に産れたのがジョージであるから、恰度ジェームス一世の曾孫に當るのである。だから、イギリスの從來の王系の胤が他にない以上、このジョージ親王が當然踐祚令によつて、王位に登ることとなつた。尤もスチュアート王系の血を受けた人は、一六八八年の革命でフランスに亡命したジェームス二世父子もあつたけれど、何れもカトリック教徒であつたから、踐祚令によつて、その資格を失つたのであつた。

ハノーヴァーからイギリスに渡つてその王位に登つたジョージ一世は、即位の時既に數へ年で五十五歳であつた。この人はドイツに生れて、ドイツ流の教育を受けた生粹のドイツ人であつた。彼は各地で戦争をした経験を積んだ一介の武人であつて、餘り教育の素養はなかつた。而も利己主義の人であつた。この人は將來イギリスの國王に登ることが、大概豫め判つてゐたのだから、英語を知つてゐなければならぬ筈であつた。ところがジョージの母ソフィヤ即ちハノーヴァー選舉侯夫人は英語が嫌で態とこれを教へなかつたといふことであつた。兎に角ジョージは英語を知らなかつた。いよいよイギリスに迎へられて、王位に登つた。さて内閣會議を主宰しようにも英語が出来ない。當時ドイツからジョージ一世に扈從して、イギリスに行つた人の中に英語の出来る人はあつたであらう。ところが、英國人といふものは非常にお國自慢で外國語を話さない人が多い。それで大臣の中でも、ドイツ語の出来る人はなかつた。當時の外交上の用語は勿論フランス語であつた。然るに、ジョージ一世もフランス語を話せなければ、イギリスの大臣も話せなかつた。そこでジョージ一世は止むを得ず、頗る下手なラテン語で、その時の首席大臣ラルポールと會話したといふことである。だから、どうせ兩者の意思は十分疎通しなかつたことであらう。ジョージ一世は英語を話せなかつたから、親から内閣會議を主宰することが出来ずして、一國の大切な國策上の相談は自然内閣に放任するやうになり行つた。これが偶然にも内閣制度の確立せらるるに至つた一箇の大きな理由にならうとは、隨分奇妙な影響もあるものだと思ふ。

五

他に今一箇内閣制度を確立するに非常に好都合な事があつた。當時の内閣大臣中、最も権力のあつたサー・ロバート・ヲルボールは、イギリスの内閣制度を確立せしめ、從つてイギリスの議會殊に庶民院をして政治上権力を持たしむることに非常に努力した一代の大政治家である。この人が閣僚の中で、嶄然群を抜いてゐたが爲、大に内閣制度の發達に好都合であつた。ヲルボールの父も有名なる政治家であつたが、彼はその三番目の男子で、兄二人が早死した爲、富裕なる父の財産を繼承した。この人は從來腐敗政治家の代名詞であるかのやうに、日本に傳はつてゐた。それはさう傳はつたのも止むを得ないかも知れぬ。この人は勿論政治といふものはプラクティスなのだから、國家の目的を達成せんが爲にはいろゝの手段を探らなければならぬことを感じてゐたのである。正當の手段で國家の目的が達せらるれば、勿論ヲルボールもそれによつたに違ひない。ところが正當の手段で國家の目的が達せられなかつた場合にどういふ事をしたかといふと、その時分彼は議員を買収すべく多額の金を使つた。ヲルボールは自分が金持であつたから、決して賄賂は取らなかつた。けれども自分で人に賄賂を遣ふことは平氣でやつた。國家の目的の爲に多數議員を政府の味方に引つ張り込もうとするには、止むを得ず有ゆる手段をとらなければならぬのだが、必要に應じては、議員を買収することを躊躇しなかつた。金の好きな人には金を

贈つた。地位の好きな人には地位を贈つた。或は女性の好きな人には、女性を推薦するといふ事をやつたかも知れない。兎に角ラルポールは『人間は皆市價を持つてゐる』と言つたと傳へられてゐる。甚だ奇矯な言葉であるが、實際は或政黨の集會か、何かの會合で、ツイ口が滑つて、『諸君は皆市價を持つてゐる』と放言したといふことである。それが爲、彼の名は腐敗政治家の代名詞のやうに傳へられてゐるけれど、他を腐敗せしめても、決して自分は腐敗してはゐなかつた。さういふ時代であつたから、我國今日の議員が選舉をされんが爲に澤山金を費し、隨つて、その埋合せに隨分收賄もするといふ事があり得るやうに、十八世紀前半時代のイギリスには矢張りさういふ弊害が行はれてゐた。今日イギリスは最もこの點に於て清淨だと稱せられてゐるけれど、その時代にはラルポールをして、以上に述べたやうな手段を取らざるを得ざらしめた程、それ程政界に情偽が行はれてゐたのである。

六

かくの如き非難が加へられたにも拘らず、ラルポールは當時の大政治家であつたと同時に、一方に於て大財政家であつた。イギリスの財政制度の基礎を樹てたのも彼であつた。少ビットの時減債基金の制度を立てゝイギリスの財政の基礎は更に鞏固を加へたのだが、その根基を築いたのは、即ちラルポールであつた。それから出来るだけ戦争を避けて、外交上の樽俎折衝で、國際間の問題を解決する平和主義

を採つたのもヲルポールである。だから、彼の時代には長い間戦争がなかつた。

それから、ヲルポールは國會の地位を高めんが爲には、如何なる努力をも惜まなかつた。そこで責任内閣を確立せんが爲、自分と同主義の者を内閣に入れることに盡瘁した。苟くも自分と主義の合はない者は、内閣を罷めさせる手段を取つた。併しヲルポールは國會にホイッグ黨を代表してゐるのだから、自分等を選舉した選舉人が内閣に對して不信任の意を表明すれば、何時たりとも自分の地位を擲つといふ覺悟が彼にあつた。チ・ブナムといふ所の選舉競争の請願事件に關して、ヲルポールが後援してゐたホイッグ黨側の候補者が國會の投票で敗北した。彼はホイッグ黨のこの失敗を以て、内閣に對する不信任投票である、ホイッグ黨が國民に飽きられた證據であるといつて、國王が如何に引き留めても、到頭辭職した。これは即ち國民の多數が選舉してゐるその國會の信任を失つた以上は、自分は何時たりとも、宰相の榮冠を挂けるといふ立派な模範を示したものである。いろいろ腐敗政治家のやるやうな事を行つたから、後世に悪評が残つてゐるけれど、好い事も中々やつたから、差引してもヲルポールは殊に議會政治に對して、大いに功勞のあつた政治家たることを失はぬであらう。

ジョージ一世は前に述べた通り、英語を話さなかつた爲に自分で内閣會議の主宰をしなかつたので、從つて、當時未だ宰相といふものは勿論なかつたが、ヲルポールは同じ大臣の中で一番抽でてゐたから、自然國王の代りに後年の宰相のやるやうな事をして、宰相たるの實を示した。此の如くして、ジョージ

一世の時代にはじめてイギリスの宰相といふものが出来たのである。出来たには出来たけれども、法律上認められた譯ではなく、唯だ同じ内閣總理大臣の中で、その人が一番勝れた人物であつたから、自然宰相の權力を實際行ふやうになつた次第である。

七

それから、話が少し岐路に入るけれど、イギリスの政黨政治の發達に關係あるハノーヴァーに起つた事件に説き及ぼさねばならぬ。

元來ジョージ一世は上に述べたやうに、ぶつきら棒の軍人で、學問がなく、従つて趣味の俗惡な人であつた。彼が未だイギリスの國王に擧げられない時、本國なるハノーヴァーの直ぐ近所の領地を合併せんが爲の政略上から、従妹のソフィヤ・ドロデヤと結婚した。さうしてこの婦人をば選舉侯夫人に擧げた。ところが、元來愛のない結婚であつたのだから、殊にこの婦人の母親が地位の低い產れで、要するに王侯の家と結婚の出來ない家柄の出身であるといふので、ジョージも輕蔑すれば、母のソフィヤも嫁のソフィヤを憎んだのであつた。良人と姑とに苛められたので、ソフィヤは非常に自分の薄運を嘆いてゐた。ところが、其處にスウェーデンからハノーヴァーに來た風采のよい而も武士としてなかなか強かつたケニヒマルクと云ふ伯爵がゐた。ソフィヤは夫の虐待に堪えかねて、屢々宮中から逃走しようと計

書した。さうすると、ケニヒマルクは逃亡の手傳ひをしてやつた。これが嫌疑を招く因となつて、結局ソフィヤは離別された。さうしてケニヒマルクも後に何處へ行つたか、全く行衛が知れなくなつた。これはジョージが刺客を放つて殺させたといふ説もあれば、ジョージが自から手を下して殺したといふ説もある。何れにしても殺されたらしい。さうして、ソフィヤは自分の里方のドイツの田舎の別荘で、終生夫ジョージの殘忍酷薄を怨み恨み、其處で不幸なる一生を送つたのである。

一方に於て、ジョージは母ソフィヤの腰元と愛に陥つた。それが後イギリスに伴ひ行かれてケンダル公爵夫人になつた。ジョージはどういふものか、美人であつたソフィヤを離別して、寧ろ醜婦ともいふべきケンダルを非常に愛した。それから今一つ第二のお妾があつた。それは後にダーリントン男爵夫人となつたのだが、これも矢張り醜婦であつた。元來悪趣味なるジョージには、美醜を甄別する美術眼をも缺いてゐたかも知れない。殊にケンダル公爵夫人は事實イギリスの王妃の役をやつた婦人で、ジョージ一世に對して餘程の魅力があつたやうである。口の悪い傳記作者がこの夫人を形容して、恐ろしく背の高い生氣のない顔色をしたなどと評してゐる。他のダーリントン男爵夫人に對しても隨分酷評を下してゐる。ところが、ケンダル夫人の方はジョージ一世に對して魅力を持つてゐた結果、イギリスの政治に對して、この婦人の勢力がなかく影響を及ぼした。この夫人に對し、後宮の内謁が行はれて、非常に賄賂を贈ることが行はれた。何でもその時分の金で十萬磅ほど取つたといはれてゐる。ジョージ一世

は軍人で、隨分利己主義の人ではあつたけれど、左程卑しい人ではなかつたのだが、彼がドイツからイギリスに伴れて行つた人々の一團は皆悪い仲間であつたようである。これ等の人々が非常にイギリスの政治を腐敗せしめたのである。

八

ジョージ一世とケンダル公爵夫人の關係はそれとして、ジョージがその正當の妃であつたソフィヤを虐待して結局離別することになつたが、その間に生れた後のジョージ二世、この人は自分の實母が、元々無實の罪で虐待せられて、その結果離婚までされた事に對して、非常に父を怨んでゐた。それで、これは殊にハノーヴァー王家は奇妙にも歴代親子仲が悪いのであるが、このジョージ一世の時から親子仲の悪い手本を出したのである。非常に仲が悪い。後には殆ど言葉も替はさない。それから父子別居する。

ジョージ一世が死んだ時に、遺産はケンダル公爵夫人に大部分やるやうな遺言書を遺して、ジョージ二世には殆どやらなかつた程、それ位に仲が悪かつた。ところが、國王と皇太子との親子仲が悪かつたといふ事が、イギリスの政黨政治に間接なる關係を及ぼした、といふのは、親子仲が悪い爲に、皇太子の方は何時でも國王の反対黨に味方するようになつた。これは唯だジョージ一世とジョージ二世の場合ばかりでなく、ジョージ一世とジョージ三世の場合も、それからジョージ三世とジョージ四世の場合も皆

さうであつたのである。これがイギリスの政黨を發達させる間接の原因となつた。詰りジョージ一世親子の場合に於ては、子が父を怨み悪んだ結果、父王の味方をしてゐたホイッグ黨とは反対のトーリイ黨の味方をするやうになつた次第である。

それからジョージ二世は勿論ドイツで生れ、ドイツ語で教育せられたけれど、長くイギリスにゐたので、英語が話せた。さうしてイギリスの事情も分つてゐた。併しながら、既に一旦ジョージ一世の治世十三年の間に、内閣會議は内閣の一一番有力な政治家が主宰することの例が出来たのだから、ジョージ二世がこの先例を打破することは出来なかつた。ジョージ二世も矢張りその青年時代までドイツで送つた人で、生え抜きの英國人ではなかつたから、自身はイギリスの政治に對して趣味もなければ、政治にたづさはる習慣もないし、従つてジョージ一世と同じく、内閣の主宰は自然とこれをラルボールに任せたのであつた。而して國會の多數黨を代表したその黨派の領袖の人々が、五人なり七人なりで、内閣を組織することになつた。それで内閣の基礎はジョージ二世の治世にも、著々と確立せられ來つたのである。

九

ハノーヴァー王系の三代目のジョージ三世の治世になつて、反動が起つて、王權は一時盛んになつたけれど、前二代に亘つて確立せられ來つた内閣制度を顛覆するには至らなかつた。ジョージ三世は王室

の式微を慷慨せられて、何とかして王權を回復しようと努力した。ジョージ三世の母君はジョージ二世の娘で、早死せられた皇太子の妃である。この皇太子妃はなかなか野心深い女性であつて、前二代の間に内閣に奪はれた王權を國王の手に恢復しようといふので、豫ねてからいろいろと工夫を凝らされた。

それでジョージ三世を教育するに際して、頻りに國王たる者は神さまから一國を支配する權力を託せられてゐるといふやうな謂ゆる帝王神權説を教へ込んだのであつた。『ジョージ、お前は本當の王様にならなければならぬ』といふことを、始終口癖のやうにいつて教へた。それで、ジョージ三世が王位に即くと、如何にもしてイギリスの王權を回復しようといろ／＼工夫した。が併しながら、ジョージ三世と雖も、前二代の間に著々と基礎を固め來つた内閣制度に手を著くることは出來ず、矢張り内閣會議の主宰はこれを有力なる大臣に委任するの外なかつた。ジョージ三世は何といつても、國會の多數を占めなければ、如何なる法案も通過さすることが出來ないのであるから、國會の多數を制することに努めた。この國王は祖父や曾祖父と異つて、イギリスに育つた生粹の英國人であつたから、品行も正しく帝王の學問に通じ、非常に正直であつたから、眞剣に國會の操縱に努力した。彼は國會で多數を制せんが爲には、いろいろ策略を廻らした。それには矢張りヲルポールの行つたのと同じ手段を取らなくてはならなかつた。國會で多數を制するには、矢張りヲルポールの轍を踏んで、議員を買收するの外、方策はなかつた。そこで議員の買收費を捻出せねばならなかつたのだが、その財源に困つた。國會から議員の買收費を取

り出すことは出來ないのだから、それを捻出するの外なかつた。ジョージ三世は即ち非常に宮中の費用を節約した。一例を舉ぐれば、イギリスの中等階級の常食とする馬鈴薯と羊肉とに甘んじて、費用を切り詰め、かくして剩し得たる金を議員の買収費に充てた。或はヲルボール以上に黃白を散して、議員を買収した。かくして、キングスフレンジと稱せられた國王の御用黨を作つた。そして國會を左右して、従つて内閣の政策をも自家の腹心をして操縦せしめたこともあつたけれども、大勢は何うしても盛返へすことは出來なかつた。ジョージ三世は餘り正直過ぎたから、北米合衆國の十三州の殖民地に干渉して、結局全部これを失つて了ふことになり、それからアイルランドの叛亂とか、フランス大革命とか、續いてヨーロッパに大戦争が勃發したから、竟に發狂した。一度は癒えて再度發作し、遂にその爲に死去した。斯くして、内閣制度はジョージ三世の王權恢復によつて、一時は一寸頓挫したにも拘らず、大勢は依然として、この制度の確立を促進したのであつた。而も法律上には矢張り承認せられなかつたのみならず、ヲルボール自身すら、他の攻撃に對して、自家の確立せんとしつつあつた内閣制度の慣習を辯護することを爲さずして、却て内閣制度の中樞機關たる宰相の名稱及び官職を公けに否認した程であつた。而してこの制度が一層確立の基礎を固めたのは、少ウイリアム・ピットの宰相時代であつた。ピットは一八〇三年閣僚メルヴィルとの會話中、イギリスにては最も國王の信任を受け、主として國王を輔弼する威望を有する公然たる大臣を置くことの極めて必要なる所以を切論して、且こ

の權力には何等の反對或は何等の分權あることを許さず、而してこの權力は一般に首相と稱せらるる人に存せざるべからず云々と述べてゐる。兎に角、ピットの執權時代に宰相の制度は殆ど全く確立せらるに至つた。而も内閣と宰相とが最早動かすべからざる基礎を確立したのは、十九世紀の中葉に宰相となつたサー・ロバート・ピールの時代である。ピールは即ち完全なる宰相の模範を示し、從つて完全に統一せられた内閣の主人であつたのである。かくしてタルボールによつてその緒についた兩制度は、爾後約一世紀半の歴史を経て、ピールに至つて漸く完成せられた次第である。而も尙ほ内閣も宰相も兩つながら、法律上公認せられてゐないことは、今日と雖も十八世紀初頭と同様である。

(八、一〇、二五)

附記。この一小篇は先年或通信の學會で試みた講演の速記を校訂補修したものである。だから、素より本誌に掲載すべき性質のものでないと思つたけれど、編輯主任の請に任せて、敢て茲に掲出した次第である。従つて参考書目等は一切省略したけれど、これを試みんが爲に、少からず参考書を涉獵したことだけは、断つて置いても、可いと思ふ。